

間縫刺繡羅帶残欠（中倉104）の復元的考察

田 中 陽 子

はじめに

正倉院には約155点の帯が収蔵されている。ラピスラズリを飾った革帯、伎楽装束に用いられた革帯あるいは染織の帯、小さな刀子が下げられた組紐の腰帶などその用途や素材は様々で、大仏殿を飾った長さ7mにも及ぶ綾の帯のような服飾品以外の品も含めたならば、かなりの数にのぼるであろう。

帯の素材には大きく革製と絹製の2種がある。中国では後漢より「男子鞶帶、婦人帶絲」⁽¹⁾とあるように、女性には主に絹製の帯を使用した。

本稿で取り上げた間縫刺繡羅帶残欠（中倉104）は、絹製の2種の夾縹羅によって幅4cmに仕立てられ、その上に刺繡をほどこし、隙間の羅地には金銀泥で花鳥雲などを描いた⁽²⁾、極めて軽やかで優美な帯である。正倉院に伝わる帯の中でも、女性的な服飾の優品として知られている（挿図1・2）。

しかし残念なことに、現在この帯は大小4片に分断された状態で伝わっており、帯の全容は未だ明らかでない。また、琥碧魚形（中倉105）は帯に下げる佩飾りであるが、この下げ紐の結び目にも、間縫刺繡羅帶の断片が認められる。だが、これらの接続箇所について考察がなされたものはない。

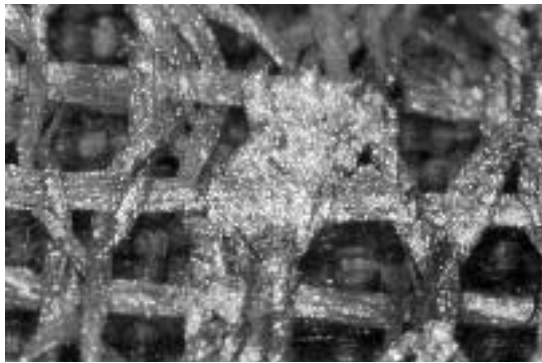
そこで本稿では、帯の制作技法や刺繡文様の配置に焦点をあて、帯が断片化する以前の状態に復元することを試みたものである。

1、刺繡羅帶に関する中国の例

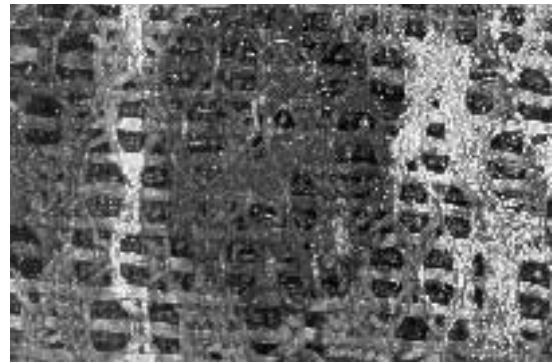
正倉院の宝物は、中国・唐からの舶来品やその文化的影響を受けたものが多い。正倉院に伝わる多数の服飾品においても、唐代の服飾の影響が諸所に見受けられる。

唐代の文献には、羅帶についての記述は多い。しかし、輿服志に記されているような衣服に関する規定や禁令は少なく、大半は詩の中にあらわれる点が注目される。内容の多くは夫婦の信愛を帯にこめて歌ったもので、別離の際の愁いをこめたものもある。これは「同心結」⁽³⁾という古来からの言葉があるように、帯の固くて解けない結び方を夫婦の固い絆に託した表現と考えられる。

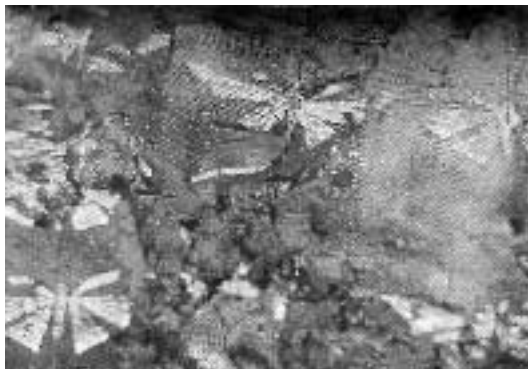
また、花と枝が相互に絡み合った文様の「連理帯」、チェーン状に繋いだ文様の「鎖蓮帯」などの帯に加えられた刺繡文様には、「恩爱不渝」「情義綿綿」の寓意がある。このような寓意は革帯には見られないものであり、刺繡羅帶の使用者が女性であり、公的な用途が少なかった為であろう。



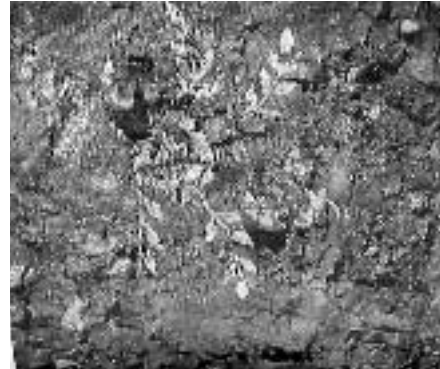
挿図1 間縫刺繡羅帶(中倉104) 金泥部分



挿図2 同左 銀泥・金泥部分



挿図3 中国陝西省法門寺出土 金薄で加飾した織物



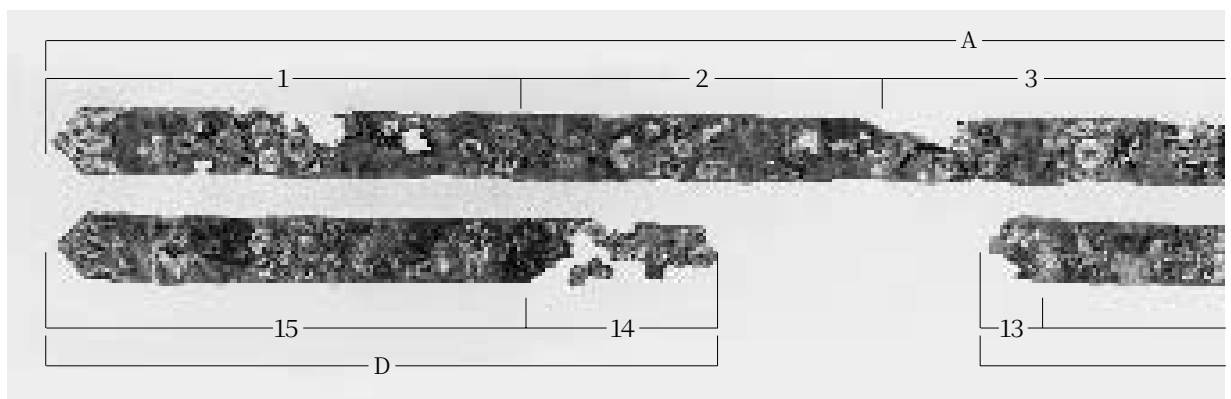
挿図4 同左(「法門寺」陝西旅遊出版図版より転載)

更なる帯の加飾として、金銀泥で描き絵をすることは唐代にもあった。『全唐詩』に収められた漢詩の題に「書歌妓泥金帯」⁽⁴⁾というものがあり、帯に金泥を施すことが女性の間で好まれていた様子がうかがえる。『唐六典』には当時の織物におよそ14種の金の加飾が用いられていたことが記されており⁽⁵⁾、中には金泥絵に関わる「泥金」「銷金」の名称が認められる。(挿図3・4)

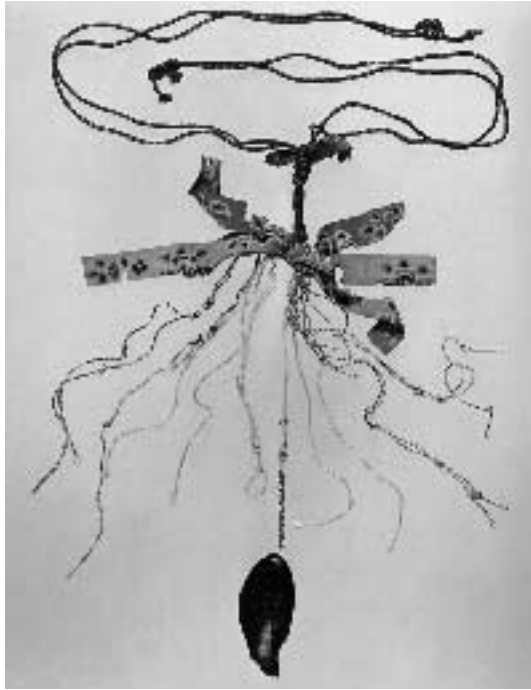
2、間縫刺繡羅帶の復元

1) 間縫刺繡羅帶の分断の経緯

間縫刺繡羅帶は現在4つの断片として伝わっている(挿図5)。この分断が奈良時代のものか、経年変化により後代に生じたものかは明らかで無く、各断片が繋がった状態を知る資料は現在のところ見つかっていない。また琥碧魚形の繫着紐の結び目には、間縫刺繡羅帶と同じ刺繡



挿図5 間縫刺繡羅帶残欠(中倉104)



挿図6 琥碧魚形（中倉105）

羅の裂が付着しているので（挿図6）、かつてこの2件の宝物は1件であったと想像される。そこで2件の宝物が整理された記録を追ってみると、その歴史は比較的浅いことが分かる。

正倉院宝物の名称を知るには国家珍宝帳に始まり、その後、数度行われた曝涼・開封・出入などの記録⁶⁾によって、国家珍宝帳記載の宝物以外についても次第に明らかとなる。しかし、現在明らかになっている2000件あまりの正倉院染織品に較べれば、それに関する記載は少なく、記載があったとしても「古裂類」などと大まかに括られており、1件1件の染織宝物の名称が立てられるようになったのは、町田久成、蜷川

式胤らによる明治政府の調査が始まってからと言える。その後、御物整理掛の発足により宝物の調査・修理が始まると、宝物の整理は急速に進んでゆく。このような経緯を踏まえて、間縫刺繡羅帯と琥碧魚形についての記述を探してゆくことにした（表1）。

明治政府発足以前の最後の点検目録である天保の記録では、帯に関する記載はあるものの、宝物1件を特定するにはおよそ及ばないものである。次に、明治15年（1882）の「正倉院御物目録」⁷⁾は、校倉内での宝物の配置状態を示した文字による目録であるが、これには目録に対応した宝物を淡彩画で描いた冊子がついている。ここに描かれた絵は簡単なものとは言え、一見して現在の宝物との対応が明確な品も多いことから、一つの参考になり得るものである。幸いにして冊子絵の中には間縫刺繡羅帯および琥碧魚形と思われるものがあった（挿図7）。ここに描かれた明治15年の間縫刺繡羅帯は1本に繋がった完存した状態であり、また琥碧魚形は帯には結び付けられてはいない。但し、この冊子中の彩画には不明な箇所もあり、資料的な価値には疑問が残ることから、今後、他の資料による確認が課題である。なお、この絵に該当する

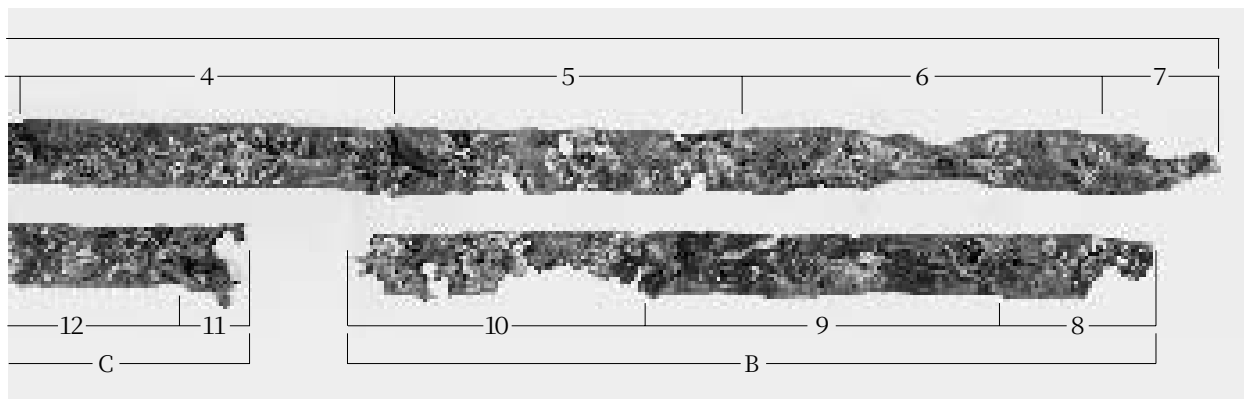


表1 間縫刺繡羅帯・琥碧魚形に関する整理・調査記録履歴

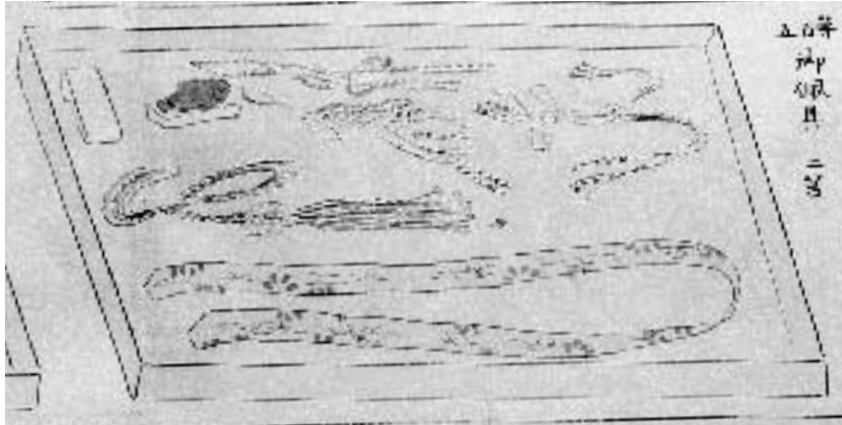
時代	年	間縫刺繡羅帯残欠（中倉104）	琥碧魚形（中倉105）	備考
天保	4	「中御倉…同 一列 長持一箇内 絹帯類 一筋」		「天保四年 正倉院御 寶物目録一卷」
明治	15	「南上」「第九戸棚」「第百五号 一 御 佩具 若干 若干 二箇」		「正倉院御物目録 十 六及十七」「明治十五 年十月改 正倉院御物 陳列目録」
明治	37	「衣服ノ部 調査済」「一、花鳥紋繡羅帯 残欠二枚 一枚三切」		「正倉院御物 未修繕 還納品何目録」
大正	2	「五月三十一日 晴 一、 此日左ノ 御物ヲ仮倉庫ヘ移納ス」「中倉納物」「間 縫刺繡羅帯残欠 壹條、」	「五月三十一日 晴 一、此日左ノ御 物ヲ仮倉庫ヘ移納ス」「中倉納物」「琥碧 魚形 壹隻」	「御物録 大正二年 分」「正倉院寶器移納 日誌」
大正	3	「十月十一日 晴 此日左記ノ御物ヲ 仮納所ヨリ取出シ中倉ヘ還納ス」「間縫 刺繡羅帯残欠 壹條、」	「十月十一日 晴 此日左記ノ御物ヲ 仮納所ヨリ取出シ中倉ヘ還納ス」「琥碧 魚形 壹隻」	「御物録 大正三年 分」「正倉院寶器還納 日誌」
大正	13	「中倉納物」「間縫刺繡羅帯残欠壹條 花鳥繡、金銀絵、」	「中倉納物」「琥碧魚形壹隻 尾微破、銀 鎖連結雑色組、繫着前件刺繡羅帯、今帯 壞繫絶、但形跡可見」	「正倉院御物目録」 「凡例 一、本目録ノ 原本ハ明治四十一年十 月宮内省寶器主管ヨリ 引継ヲ受ケタルモノナ リ 奈良帝室博物館 正倉院掛」
昭和	5	「拾一月一日 晴 一 間縫刺繡羅帯残 欠 一條 中倉」		「正倉院録 昭和五 年」「御物調査日誌」
昭和	5	間縫刺繡羅帯残欠 1 條 長約260.0 巾4.0 四片ニ切断サル。蘇芳緋ヲ心トシ褐色夾 繡羅 鶯茶夾繡羅トヲ 表（矢羽根図） 裏（矢羽根図）形ニ縫ヒ合ハセ 紫・黄 ・白・紅・緑・茶・藍ノ諸色糸ニテ唐花 文、花喰鳥、草花文等ヲ刺繡シ又金銀泥 ニテ雲文花文等ヲ描ク 両端ニハ葉状ノ 紫糸ノ刺繡アリ 中央ニハ二ツ折ニシテ 垂レタル形跡残ル」	琥碧魚形 1 隻 …幅1.8ノ帯ヲ着ク結ヒ目ハ三幅ヲ重ネ タリ 刺繡羅帯 褐色菱形ニ花文ノ刺繡。 寶器主管目録ニ；尾微破 銀鎖連結雑色 組 繫着前件刺繡羅帯 今帯壞繫絶 但 形跡可見；トアリ（略図）」	「正倉院御物調査書 中1」

ものとしては、目録に「御佩具」と一括して記載されているのみである。

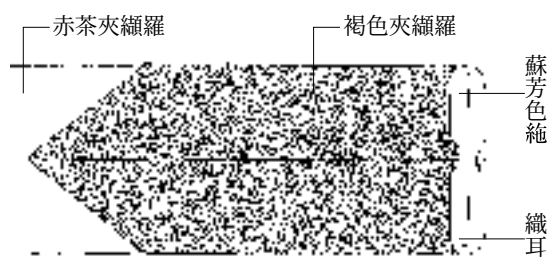
間縫刺繡羅帯が記録上初めて確認できるのは「正倉院御物未修繕還納品何目録」⁽⁸⁾である。明治25年(1892)から37年(1904)にかけて東京帝室博物館に設置された正倉院御物整理掛に、奈良から宝物が送られ、計画的な修理が行われた。この目録は修理後、奈良に還納する際のもので、中には合計1,663件の宝物名が現れる。この中の明治37年「一、花鳥紋繡羅帯」が本品に該当するものと思われる。これには「残欠二枚 一枚三切」と続いている。これは、大片が2枚有り、2枚のうち1枚が3片に切断していることを指しているものと思われるが、これは現在の帯の状態と一致しており、明治37年の状態では、既に4片に帯が切断していたようである。

「花鳥紋繡羅帯」は、奈良から東京帝室博物館に整理のため送られたが、調査のみが行われ、未修理のまま再び奈良に還納されている。

明治37年の段階で、かなりの点数の宝物が整理され、その状態が確認できている。今日、正倉院事務所において使用されている『正倉院御物目録』には、凡例として明治41年に宮内省帝



挿図7 正倉院御物陳列目録より



挿図8 縫製図（経糸←）



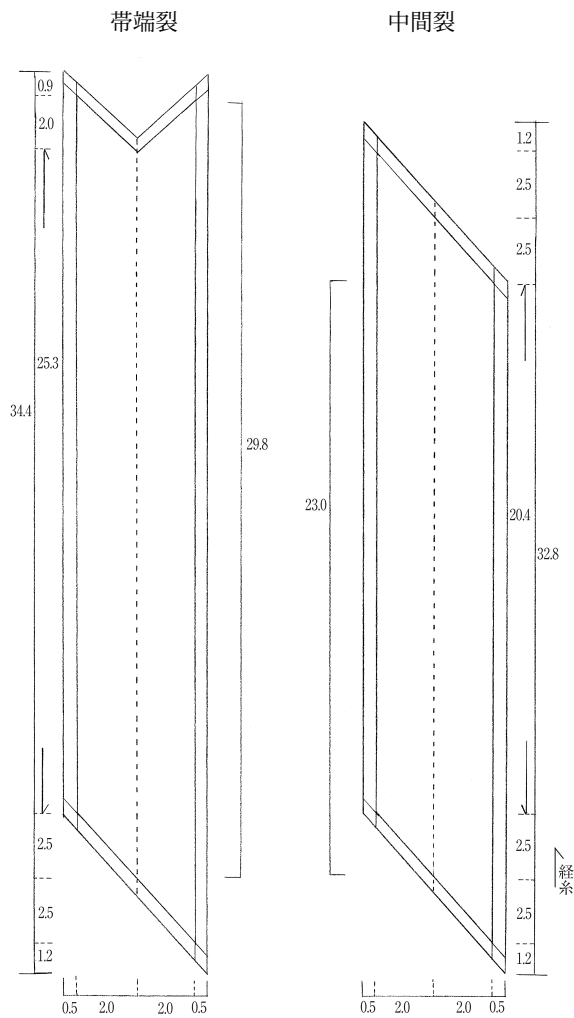
挿図9 紵織耳部分

室宝器主管より引継ぎを受けたものであるとの記載があることを考慮すれば、この時点で既に主要な宝物についての名称および目録整理が進んでいたものと思われる。ちなみに、大正2年（1913）に校倉の解体修理が行われた際、校倉内の宝物を正倉院構内の持仏堂・聖語蔵・土蔵・仮倉庫に移動させたが、このときの移動記録には、現在使用されている名称と同じ宝物名が記されている。さらに昭和5年（1930）には、間縫刺繡羅帯および琥碧魚形の調査が行われ、その調書が残っている。

以上の様な経過をたどり、間縫刺繡羅帯（中倉104）および琥碧魚形（中倉105）の名称と形状を知ることができる。しかし、いずれにおいても帯が完存した状態を明確に示す資料は見当たらなかった。

2）現状観察と完存状態の復元

帯の概略を説明すると、褐色夾纈羅と赤茶夾纈羅の2色の裂を交互に縫い繋ぎ、中央で縫い合わせてある（挿図8）。全体的には矢羽根状のパッチワークとなり、矢羽根の向きは帯の表裏で逆転している。芯裂として、蘇芳色紵が入っており、この紵の織密度は経糸46本/cm・緯糸30本/cm、長側の一方が織耳である（挿図9）。この織耳は、分断された4枚の断片に共通して見られるもので、この断片が元は1条の帯であったことを示唆している。刺繡は羅・紵・羅の3枚の裂を一緒に刺しており、刺し繡・纏い繡・鎖繡などの繡技が駆使されている。全長にわたって両面刺繡をし、表裏には対称に同じ文様があらわれている。帯のように、結んで垂らした



挿図10 製図



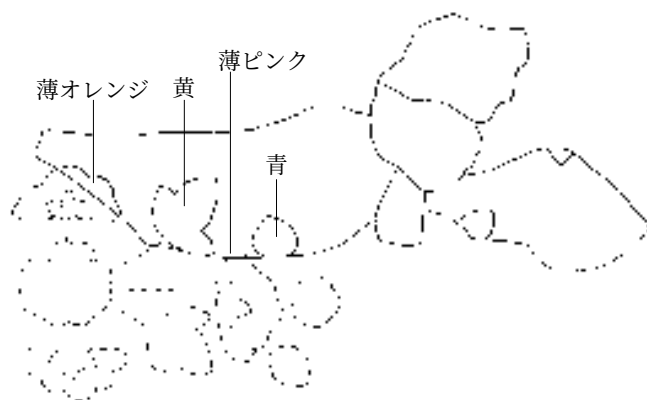
挿図11 仕立て



挿図12 錦道場幡

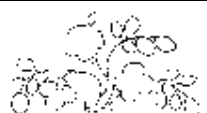
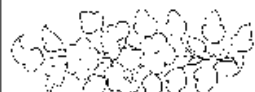
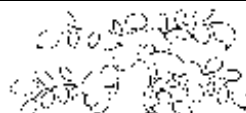
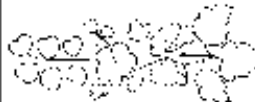
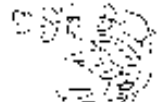
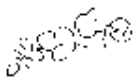
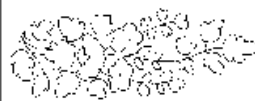
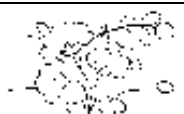
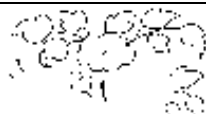
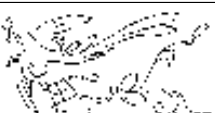
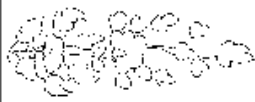
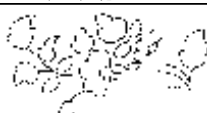
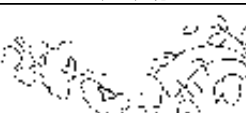
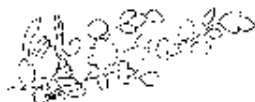


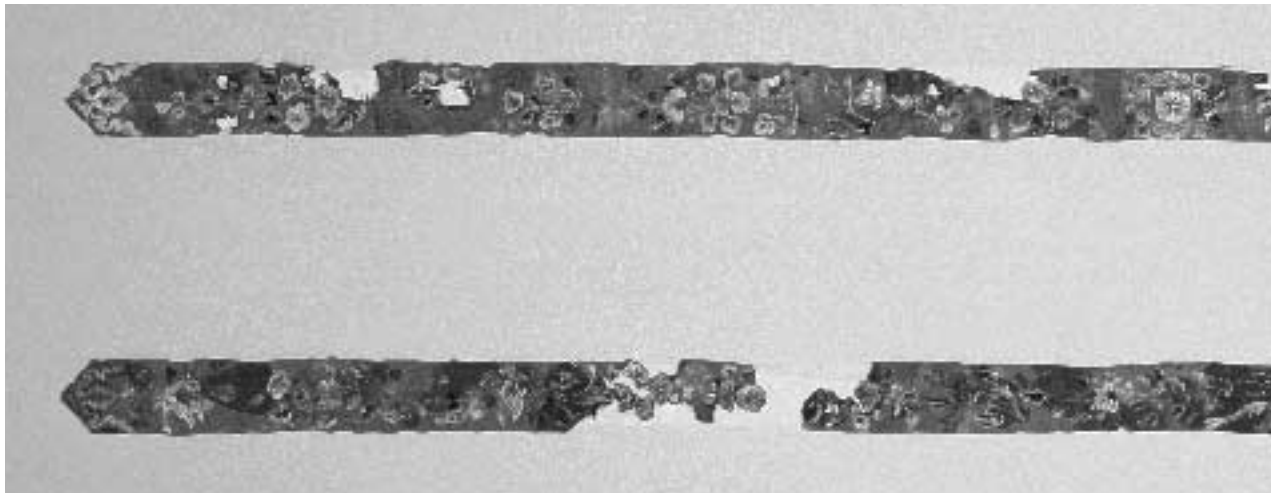
挿図13 琥碧魚形付着の帯断片



挿図14 刺繍文様 (団花)

表2 刺繍文様の配置表

完成断片	羅色	予想完全寸法	現寸法長	文様1	文様2	文様3	
1	褐色羅	29.8	29.8	(A1) 花	(A1) 花	(A1) 花	
						>	
2	赤茶羅	22.8	22.8	(A2) 花	(A2) 花喰鳥	(A2) 花喰鳥	
		>				>	
3	褐色羅	22.8	22.8	(A3) 花	(A3) 団花	(A3) 花	
		>				>	
4	赤茶羅	22.9	22.9	(A4) 花喰鳥	(A4) 花	(A4) 花喰鳥	
		>				>	
5	褐色羅	23	23	(A5) 花	(A5) 団花	(A5) 花	
		>				>	
6	赤茶羅	22.9	22.9	(A6) 花喰鳥	(A6) 花	(A6) 花喰鳥	
		>				>	
7	褐色羅	23	9.6	(A7) 花 7cm	欠失	(C13) 花 2.6cm	
		>				>	
8	赤茶羅	23	23	(C12) 花喰鳥	(C12) 花	(C12) 花喰鳥	
		>				>	
9	褐色羅	23	23.5	(C11) 花か? 4.5cm (B10) 花	(B10) 団花 19cm	(B10) 花	
		>				>	
10	赤茶羅	23	23	(B9) 含綬鳥	(B9) 花	(B9) 花喰鳥	
		>				>	
11	褐色羅	23	21.3	(B8) 花 9.5cm	(D14) 団花 11.8cm	(D14) 花	
		>				>	
12	赤茶羅	29.8	29.8	(D15) 花喰鳥	(D15) 花	(D15) 花喰鳥	
		>					
(cm)	合計	289	274.4				



挿図15 復元図（間縫刺繡羅帯・琥碧魚形）

時にどちらの面も見える可能性があるものには、両面刺繡の技法が極めて効果的であったといえよう。帯の両端が残っており、剣先状に仕立てた上に花葉風の刺繡が施されている。

復元するに当たり、間縫刺繡羅帯断片の分断された4片を仮にA・B・C・Dと割り振り、さらに、2種の夾纈羅にそれぞれ番号を付けた。この並び順は、現在の整理状態に沿ったものである。（挿図5参照）

以下、復元に関わる細かな点に注目して行く。

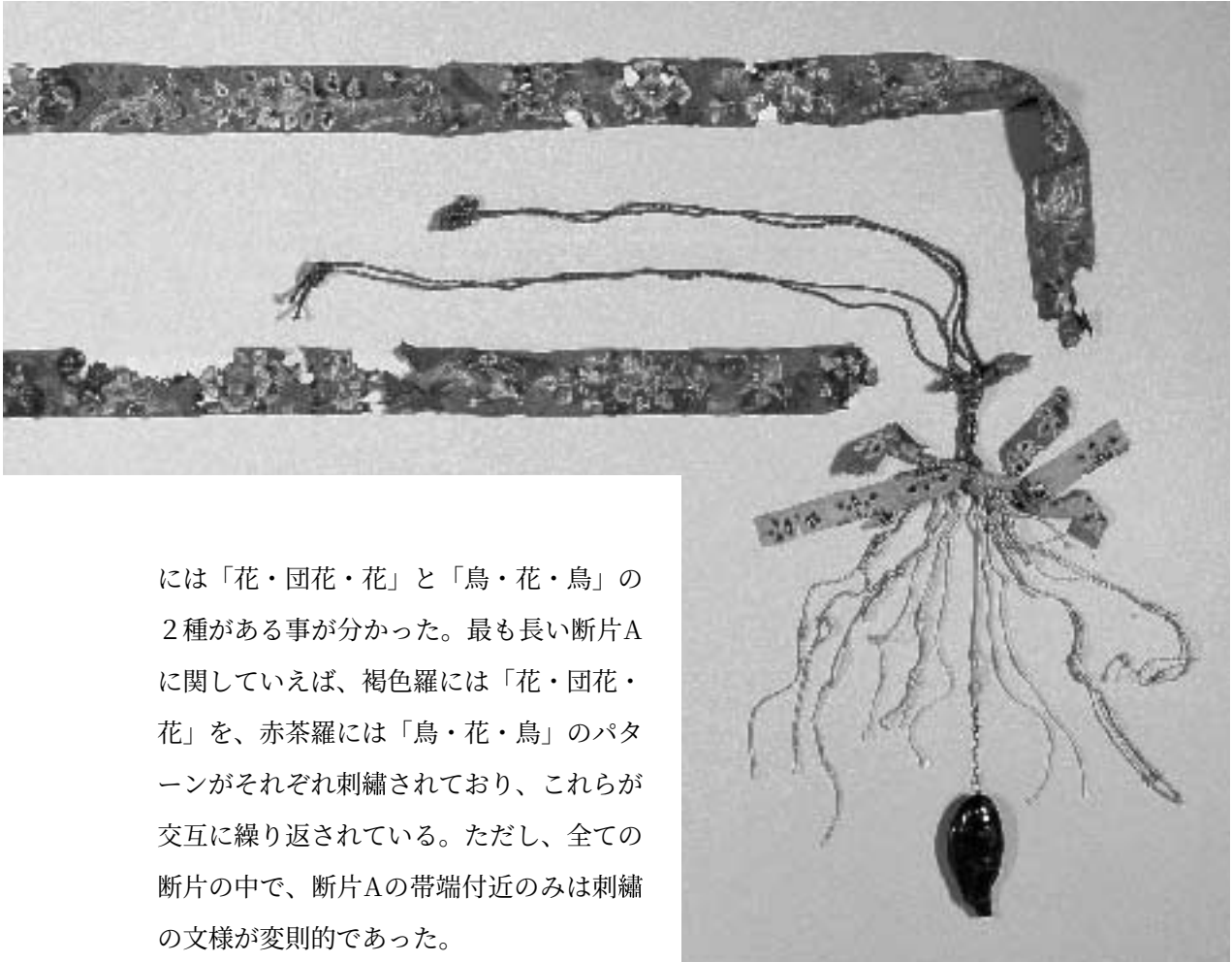
まず、仕立てについてであるが、この帯は交互に2色の羅を繰り返して矢羽根に繋いでおり、その繰り返し単位の長さが規格的に一定であることが分かった。いずれも約23cmであり、帯の両端のみが変則的に29.8cmと長い。分断箇所を含む断片については、当然この規格の長さに足りていないが、23cmを目安にすることで、どの位置で分断されたのかが推定できる。

次に、矢羽根の向きが表裏で反転する縫製法についての復元を試みる。まず、長方形の裂を斜めの平行方向に裁断したものを用意し、2色交互に縫い繋ぐ（挿図10）。これを2枚用意して、同色どうし同じ傾斜に揃えた2枚を中表にして波縫いし（挿図11）、内側を外へ返して筒状にした後、縫い目を中央線に揃えて平坦にすれば、矢羽根の繰り返しが出来る。このように長方形の裂を斜めに裁断して別裂と交互に縫い繋ぐ方法は、正倉院の幡足に頻繁に使用されており（挿図12）、正倉院の染織品においては珍しくない技法であった。

最後に、復元する際の条件として必要であることは、各断片の表面・裏面を一致させることであるが、その決め手となるのは、刺繡の下絵線の有無である⁹⁾。この帯は刺繡技法が両面刺繡であるために、一見表裏の区別が付きにくい。しかし、下絵線がある面（挿図20参照）とない面があり、これを揃えることで、表裏の統一が可能となる。実際の作業としては、刺繡の下絵線がある面を表面として、表裏を決め、矢羽根の流れを一定方向に揃えていった。

次に、各片の並び順について考察してゆくことにする。

ここで注目すべき点は刺繡文様の並びである。刺繡は矢羽根の色変わりを1区間としてまとまっており、1区間の中には3文様が入っている。全体的に眺めると、この3文様のパターン



には「花・団花・花」と「鳥・花・鳥」の2種がある事が分かった。最も長い断片Aに関していえば、褐色羅には「花・団花・花」を、赤茶羅には「鳥・花・鳥」のパターンがそれぞれ刺繍されており、これらが交互に繰り返されている。ただし、全ての断片の中で、断片Aの帯端付近のみは刺繍の文様が変則的であった。

この刺繍文様の並びを考慮に入れ、断片A・B・C・Dを並べ変えた表を示す(表2)。

この表から、分断された断片4枚の接続箇所が判明する。断片A-7と断片C-13、断片C-11と断片B-10、断片B-8と断片D-14が繋がり、完存状態の推定寸法は289cmとなる。289cmという帯の長さについてであるが、他の宝物と比較してみると、雑帯残欠中には265cmや284cm⁽¹⁰⁾の比較的長い平打組紐の帯があり、適当な長さであると言える。

なお、琥碧魚形の刺繍羅断片についても、この接続する箇所を見ておく。

この断片(挿図13)は、褐色夾纈羅であり、長さは約6cmである。完存状態の寸法と現在の寸法を比較すると、この褐色羅の繋ぎ目の中に、6cmの断片が入る可能性があるのは断片A-7と断片C-13の間でしかなく、刺繍文様の予想としては「花・団花・花」のパターンになる。これを参考に刺繍の文様を見てゆくと、まず刺繍文様は結び目を挟んで2種類あることが分かる。文様の1種は、薄オレンジの側面花・黄の葉・薄ピンクの側面花、青の小葉が確認される。黄の葉からは帯の中央に向けて黄糸で茎が刺繍されており、これは団花紋の表現と同じである。団花文の刺繍色使いを、他の箇所を参考にして考えると、中心には欠失のため色彩不明の全花、上下には薄オレンジの側面花、左右には薄ピンクの側面花、これら4つの側面花の隙間には4枚の黄色の葉が配置される。左右の側面花の周囲には3枚の小葉が付くが、当箇所の範囲内に

おいては、青の小葉のみが確認できた（挿図14）。文様のもう1種は、ほとんど確認が不可能な状態である。しかし、3つ折りにされた裏面も含めて観察すると、黄糸の鎖繻による曲線と、薄ピンクの花弁が2枚みられることから、花卉文ではないかと想像される。

以上の点を含めて、改めて琥碧魚形（中倉105）が繫着されていた箇所を考えると、6cmの褐色夾纈羅が入る箇所は、断片A-7と断片C-13の間であり、断片A-7と断片C-13の分断箇所にもみられる刺繻が、2文様ともに側面を向いた花卉文であることから、当該箇所の文様パターンは「花（花卉）・団花・花（花卉）」であったと考えられる。さらに、復元の際の表裏は刺繻の下絵線の有無から判断し、その上下方向は、芯裂の蘇芳色紵の織耳箇所を目安に判断した。

結果、断片C-13の花卉文刺繻（中倉104）と琥碧魚形につながれた刺繻羅帯断片の花卉文刺繻（中倉105）が連続する可能性が極めて高いことが明らかとなった（挿図15）。

3、間縫刺繻羅帯（中倉104）と刺繻羅帯（中倉109）の比較

1）刺繻羅帯（中倉109）に関して

正倉院には、間縫刺繻羅帯（中倉104）と共に、もう1件、刺繻羅帯（中倉109）と称する羅地に刺繻を施した鮮やかな帯がある（挿図16）。

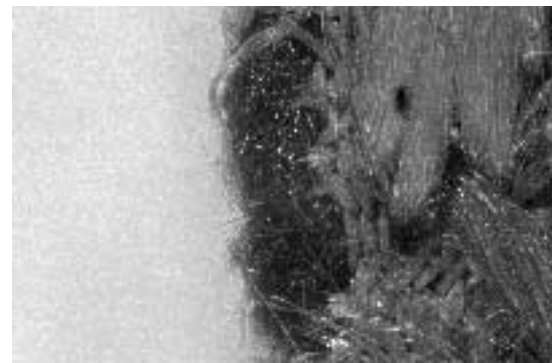
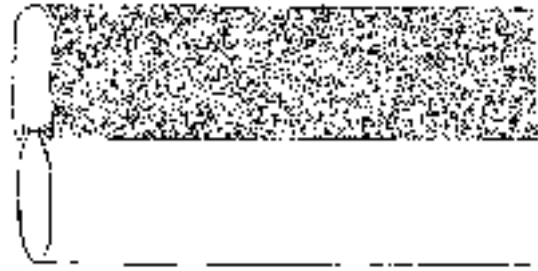
この帯は、片方の帯端が残る幅4cm・現長146.5cmの1断片で、褐色夾纈羅と赤茶夾纈羅を中央で縫い合わせた仕立のものである。中倉104の帯とは異なり、中には芯裂が無く透け通るかの様な風合いであるが、上には空間を埋め尽くすまでの刺繻がなされている。この刺繻は、文様と色糸の鮮やかさによる装飾上の効果のみでなく、両面を同時に刺す両面刺繻の技法によって帯の表裏を一体化し、刺繻をほどこさない筒状の状態よりも、帯を結んだ時の裂の歪みを防ぐ中綴じの効果を果たしている。この刺繻羅帯で用いられている縫製法の他にも、帯の生地が生じる表裏の歪みを防ぐ工夫は、正倉院宝物の縫製にはよく見られる。一例を挙げると、赤紫黒紫羅間縫帯（南倉147-16号）は2色の羅を中央で縫い合わせた仕立てであり、中央で表裏が一体となって歪みが少ない。このような中央で表裏が一体化する縫製法とは、2枚の裂を長さ方向に山折りし、4枚の重なりを一緒に縫い上げることで出来る（挿図17）。これは簡単に要領良く仕上げる方法なのであるが、縫い上げた後に、1枚の裂を表側へ反転させなければならないので、ある程度の幅が必要である。正倉院染織品の中でも、この方法を使用した縫い方は多くある。しかしいずれもある程度の幅があり、先述した赤紫黒紫羅間縫帯においても6.7cmの幅がある。幅4cmの刺繻羅帯（中倉109）には、この方法が採用されていないが、それは幅が狭かったためと推測できる。なお、刺繻羅帯には、芯裂が無いことに代わり、もう一点特徴的な点が



挿図16 刺繻羅帯（中倉109）



挿図17 赤紫黒紫羅間縫帯の縫製図



挿図18 刺繡羅帯（中倉109）
帯の両側に入っている黒紫糸

ある。帯の長側に注目すると、半菱文と半花文の刺繡が交互に繰り返されており、この長側の内側には1本の濃紫の太糸が通しで入っていることに気づく(挿図18)。一見、刺繡糸が渡っているかのようなのであるが、刺繡糸のどの色系にもあてはまらず、全く異なる糸であることが分かる。奈良時代に刺繡を刺す際に、今日の日本刺繡のように枠など使用したのかは不明であるが、刺繡の

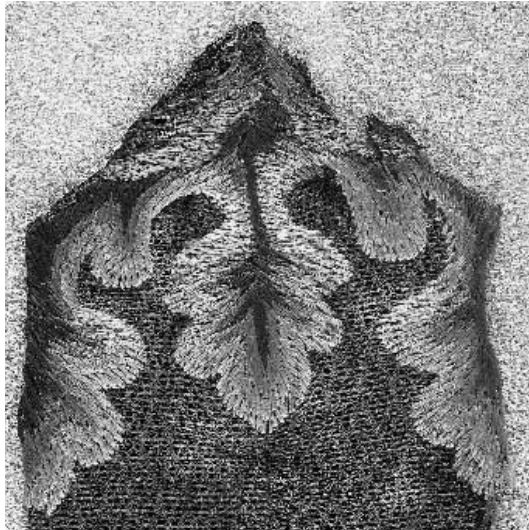
生地がある程度張っていなければ針が刺しにくい⁽¹¹⁾。帯の両端に関してはある程度引っ張ることは出来ても、長側の張りを出すことは難しかったと思われる。特に刺繡羅帯は、長側の両方に半花文と半菱文の刺繡が繰り返されていることから、長側には、ある程度の強度と地裂の張りが必要であったと考えられ、この濃紫の糸は、刺繡を補強する芯の糸あるいは長側の生地を張るためなどの工夫であったと推定できる。

2) 間縫刺繡羅帯と刺繡羅帯の比較

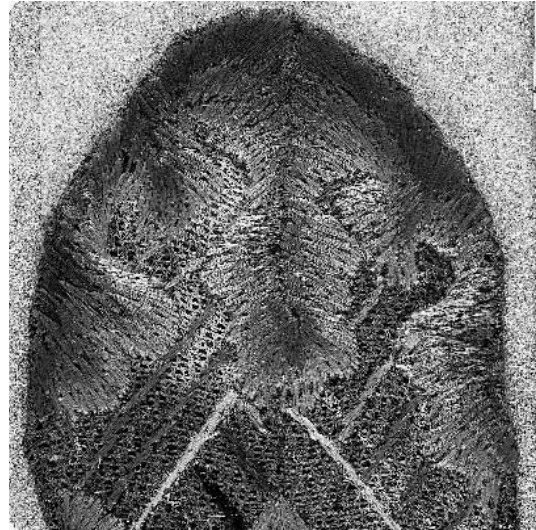
間縫刺繡羅帯（中倉104）と刺繡羅帯（中倉109）は、共に2色の夾纈羅を用いて仕立てられ、その上に花・鳥あるいは花・菱をバランスのとれた色使いで刺繡した帯である。この2条の帯は、刺繡の図様が全く異なっており、また刺繡の手が異なることから、全く別のものとして考えられ、特に比較が行われることは無かった。しかしながら、帯の生地と共に2種の羅が用いられている点、中央での縫い合わせがある仕立てである点や、帯幅が共に4cmである点、羅帯を仕立てた後に刺繡下絵を描き両面刺繡で加飾する点や、帯の両端がどちらも剣先型にして花葉紋を纒縷風に刺繡する点など(挿図19)、共通点も多い。そこで、この2条の帯について、更に一歩踏み込んだ考察を加えることにした。

まず、帯の生地である羅について見てゆく。間縫刺繡羅帯（中倉104）は、褐色夾纈の小菱格





挿図19 間縫刺繡羅帯（中倉104）帯端



刺繡羅帯（中倉109）帯端

子紋羅（中倉104褐色羅とする。以下同じ。）と赤茶夾纈の小菱格子紋羅（中倉104赤茶羅）を矢羽根状に縫い繋いだものである。刺繡羅帯（中倉109）は、褐色夾纈の小菱格子紋羅（中倉109褐色羅）と赤茶夾纈の小菱格子紋羅（中倉109赤茶羅）を縦に縫い繋いだものである。これら4種の羅は、全てが小菱格子紋羅であるが、文様の大きさ・密度・組織について調査の結果を記す（表3）。これにより4枚の裂は、共通した織り組織や紋の大きさをしていることが分かる。小菱文様1つの大きさは幅0.3cm・丈0.9cm、文様1単位を構成するために必要な糸は経糸16本（ $8 \cdot 4 \cdot 4$ ）・緯糸16本であった。なお、織糸の太さに関してはすでに調査が行われており、共に約40～50デニールであることが報告されている⁽¹²⁾。

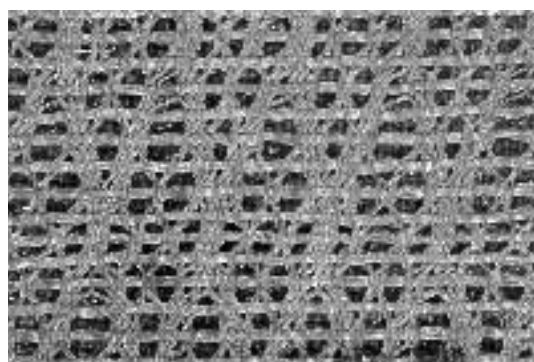
つぎに、夾纈について述べる。夾纈の全体的な文様については、刺繡で加飾してあるためにその全体像を正確に知ることはできない。しかし部分的には、小紋の染め抜きが確認できる。中倉104褐色羅と中倉109褐色羅には、小さな四ツ菱形の花紋や小さな五弁花が見られ、中倉104赤茶羅と中倉109赤茶羅には、菱格子風の文様や花卉風の文様が見られる。注目されるのは、中倉104褐色羅・中倉109褐色羅ともに夾纈の染め抜きが白色である点であり、また中倉104赤茶羅・中倉109赤茶羅ともに夾纈の染め抜きが黄色である点である。

上述した羅の織り組織および夾纈染色の結果などから、この2条の帯の地裂は、共通した2種の裂を共に使用している可能性が高いといえる。

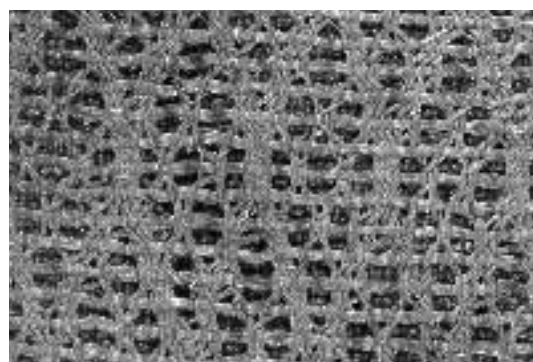
なお、2条の帯に描かれた刺繡の下絵線について触れておく。2条の帯には、共に白色の下絵線が確認されている（挿図20）。この白色顔料を分析した結果（今号年次報告・調査3染織品参照）、2条ともに鉛系白色顔料であることが明らかとなっている。ただし、この2条の帯の刺繡下絵が、同じ顔料を使用して描かれたかについては、判定が不可能であった。

最後に、間縫刺繡羅帯（中倉104）と刺繡羅帯（中倉109）の帯の切損箇所を対照してみた。間縫刺繡羅帯は帯端を含む153cmの箇所で切損しており、刺繡羅帯は帯端を含む146cmの箇所で切損している。間縫刺繡羅帯の切損は、これに繋がる琥碧魚形の重みから劣化して生じたと考え

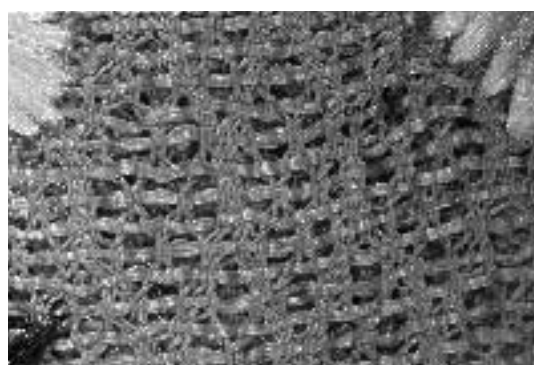
表3 羅の組織比較表



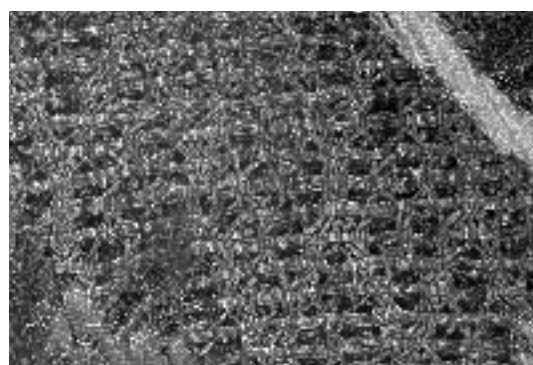
A 中倉104 間縫刺繡羅帯 (×12)
赤茶地夾縷 (小菱格子紋羅)



B 中倉104 間縫刺繡羅帯 (×12)
褐色地夾縷 (小菱格子紋羅)



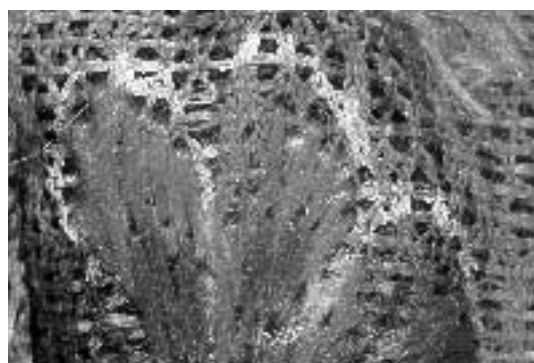
C 中倉109 刺繡羅帯 (×12)
赤茶地夾縷 (小菱格子紋羅)



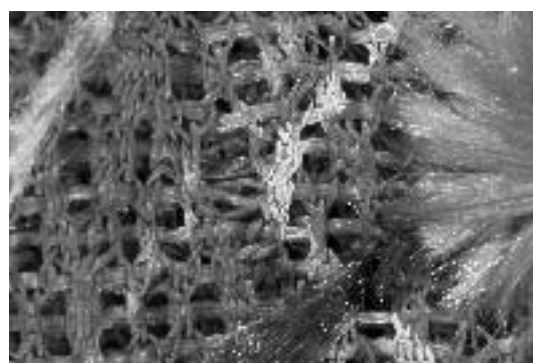
D 中倉109 刺繡羅帯 (×12)
褐色地夾縷 (小菱格子紋羅)

		A	B	C	D
糸密度 (本/cm)	緯糸	17	17	17	17
文様寸法 (cm)	幅	0.3	0.3	0.3	0.3
文様寸法 (cm)	丈	0.9	0.9	0.9	0.9
紋様糸本数 (本数/1レピート間)	経糸	16	16	16	16
紋様糸本数 (本数/1レピート間)	緯糸	16	16	16	16
紋様構成 (経糸本数)		8・4・4	8・4・4	8・4・4	8・4・4
糸の太さ (デニール)		40～50	40～50	40～50	40～50

えられるが、刺繡羅帯の切損箇所も、これに近い位置である。このことから、刺繡羅帯にも佩飾が繋がっていた可能性が指摘され、更に刺繡羅帯の全長についても、間縫刺繡羅帯に近い長さであったと推定できる。



挿図20 間縫刺繡羅帯 (中倉104)
刺繡の白線下絵 (花卉文部分)



刺繡羅帯 (中倉109)
刺繡の白線下絵 (格子線部分)

終わりに

現在4つの断片として伝わった間縫刺繡羅帯（中倉104）は、分断した状態でありながらも、その刺繡技術の高さと華麗な文様と色彩、金銀泥による描絵という華やかな姿を残し、私たちの目に天平の女性達の服飾文化を知らせてくれる。

本稿では、この分断した帯を完存していた頃の状態に復元し、その全容を明らかとすることを目的とした。その結果、この帯の復元後の全長は289cm、幅4cmであることが明らかとなった。また、最長断片の横には琥碧魚形（中倉105）の繫着紐に結ばれた刺繡断片も繋がることが明らかになった。この箇所は帯端から153cmにあたり、帯の全長の、中央から少し外れたあたりで魚形佩飾が結ばれていたことが分かった。

なお、正倉院に伝わるもう1条の刺繡羅帯（中倉109）と比較を行ったところ、帯の地裂に使用されている羅の織り組織や夾纈の文様および色彩が近似していることから、この2条の帯が、同じ2種の裂を用いて同時に作成された可能性についても指摘を行った。

【注】

- (1) 『説文解字』巾部 後漢 許慎
- (2) 金銀泥の分析に関しては、今号年次報告・調査3染織品を参照。
- (3) 「新婚詩」梁 沈約（441～513）「錦繡並花紋、繡帶同心苧」
- (4) 『全唐詩』11函4冊 韓熙載
- (5) 『通俗編』服飾、銷金「唐六典有十四種金、曰銷金、曰拍金、曰鑲金、曰織金、曰研金、曰披金、曰泥金、曰鏤金、曰撚金、曰戩金、曰圈金、曰貼金、曰嵌金、曰裏金」
- (6) 正倉院宝物の履歴を知る資料として「双倉北雑物出用帳」、787年の「延暦六年曝涼帳」、793年「延暦十二年曝涼帳」、811年「弘仁二年官物勘録」、810～833年「雑物出入帳 從弘仁至天長」、「雑物出入継文」、「東大寺勅封蔵目録記」、1574年「天正二年截香記」、「東大寺三蔵御寶物御改之帳」、1614年「慶長十九年薬師院實祐記」、正倉院御開封記草書、「東大寺正倉院開封記」、「東大寺三倉開封勘例」「二倉道具目録」「正倉院御開封勘例等御尋之日記」、「東大寺古文書目録」、「正倉院寶物御開封事書」、1833年「天保四年正倉院御寶物目録 天保四年開封」などが参考となる。続々群書類従第16 明治42年5月発行
- (7) ここで使用した資料は正倉院事務所の蔵本であり、明治15年の東京帝室博物館原本を大正12年6月から12月に書き写したものである。
- (8) 「正倉院御物未修繕還納品同目録」帝室博物館 明治37年（館史1057） 東京国立博物館蔵
「東京国立博物館蔵 正倉院御物修繕還納目録 問題と翻刻」東野治之 2002年3月 奈良大学文学部文化財学科発行
- (9) 本号「刺繡調査報告」切畑・福田論文、調査宝物4参照。
- (10) 雑帯残欠（中倉93）の前者1号、後者13号。
- (11) 平成12年・13年開封期間中に行われた刺繡特別調査の中で指摘があった。本号「刺繡調査報告」切畑・福田論文、調査宝物5《備考》を参照。
- (12) 「正倉院宝物 羅模造調査報告書」株式会社 川島織物 平成9年